

静かな賢人—工藤さんとのこと

篠原 琢

工藤光一さんと知り合ったのは、東京大学文学部西洋史学科の大学院に進学した時のことだから、もう 30 年近く前になる。

工藤さんは、モーリス・アギュロンのソシアビリテ論を援用して、修士論文を書きあげたところだった。院生の研究会での工藤さんの報告では、社会的結合をめぐる色鮮やかな分析概念を使った議論が展開されて、アナールも何も満足に知らないぼくはくらぐらした。不勉強ながらも、それでも工藤さんの議論に強い印象を受けたのは、良知力さんの『向こう岸からの世界史』や、南塚真吾さんの農業社会主義論に影響を受けていたからだと思う。

未知の社会史の世界を見せられて、ぼくは動揺した。報告を聞き終えてから、研究室に戻って、工藤さんに直接、「あの、工藤さんの議論のなかで、階級の問題はどうなっているのですか」、と、質問した。確かに卒論で、「ブルジョワ革命」の限界とか、そんなことを書いてはいたけれど、それがほんとうに聞きたかったことではないことはわかっていてた。

覚えているのは、工藤さんが、「うーん、階級ねえ」と言って、黙ってしまったことだけである。おそらくそのあと、社会運動を考えるうえでの階級概念の限界や問題点について、きっと教えてくれたに違いない。それを覚えていないのは、工藤さんの最初の静かな「うーん」に、すべて見透かされた気がしたからである。

その後も、不勉強は続いたが、ソシアビリテ論や社会史に関心を持ち続けたのは、工藤さんのおかげであった。東欧史研究会で、修士論文の準備報告をしたときも、工藤さんに「ぜひ聞きに来てください」と頼んだことを覚えている。いまから考えると、ずいぶん厚かましい。

工藤さんがパリに留学していた時期と同じ、1990 年秋から 2 年間、ぼくはプラハに留学した。その間、一度、サンテ通りの工藤さんのお宅を突然訪ねたことがある。当時、いくら通信手段が限られていたといっても、これも相当に厚かましいことであった。折悪しく、お子さんが発熱して臥

せっているところだったのに、工藤さんは、突然の来訪に驚きながらも、招き入れてくれて、たくさんワインをご馳走になった。申し訳ないことで、こんなに飲んで、というと、いや、この前同じように突然来た S 君は、ワインで足りなくて、とっておきのコニャックもみんな飲んじゃったんだから、そんなに気にすることはないよ、とוגさめてくれた。あとでもらったハガキにも S 君とコニャックのことが書いてあった。コニャックがよほど無念だったのか、いや、それより、ぼくにずいぶん気を使ってくれたのだと思う。

そのとき話したのは、留學生活の苦勞話の競い合いで、社会主義の終わったばかりの東欧なら「困った合戦」には楽勝だと思ったのに、官僚主義や形式主義はパリもなかなかひどいのであった。工藤さんはシャンパーニュ地方の文書館に調査に通っていたはずだが、そこでの話だと、プラハの方がよほどましに思えた。ただ、文書館の調査で方向を見失っていたぼくにしてみれば、工藤さんが地方の文書館に足しげく通い、確固とした方法論を自覚している様子におおいに焦りを覚えたことも事実である。また、家族連れでの滞在だったことから、「学生や研究者の世界とは違った人たちと出会えるんだよね」と語っていたことが、とても羨ましかった。

二年前パリを訪れた時に、自転車で閑雲に走り回っていると、偶然、そのサンテ通りに行き当たった。パリ南部の移民の多い地域である。お子さんを遊ばせていた公園で親しくなったのが、アルゼンチンの人だった、という話を思い出した。なぜだか、工藤さんが選ぴそうな地域だと思って、懐かしかった。

帰国してから、3 年を経て、偶然、工藤さんとほぼ同じ時期に東外大に就職した。工藤さんは、二宮宏之先生の後任ということで、とても緊張し、氣負っておられた。使命感のようなものも感じられた。新しくできたチェコ語専攻に、なんだか漫然とやってきたぼくには、このこともやはり羨ましく思われた。

工藤さんは、フランス歴史学の動向に棹さして、

18 静かな賢人-工藤さんとのこと

アラン・コルバンやピエール・ノラといった人たちの仕事を、日本の歴史学、知識界の文脈に即して、生産的、批判的に紹介してくれた。ただし、工藤さんは、何か舶来の「飛び道具」で、目眩ましのような議論をする人では決してなかった。『思想』に掲載された『『国民祭典』と農村世界の政治文化』や、科研プロジェクトで一緒にした論集、『国民国家と市民社会』で書かれた「暴力的農民」の表象と第二帝政期の農民世界についての論考が、もっとも印象的である。工藤さんは、その都会的なたたずまいとは対照的に、農民たちの生活世界に深い共感と関心を寄せ続けた。無名の人たちの振る舞い方に即して、政治史を解釈しなおそうとされていたのだと思う。それは、シャンパーニュでの文書調査の延長の仕事ではなかったか。岩波でも著書の刊行が予定されていたはずだ。さぞ無念であったことだろうと思う。

工藤さんは豪酒であった。もうずいぶん以前のこと、樺山紘一先生を囲んで、工藤さん、くだんのSくん、それに私で、何かの会の流れ、本郷の加賀屋で飲んでいた。誰が言い出したのか、一斗の酒を飲み干したら、さぞ達成感があって、愉快だろう、という話になって、一同でひとしきりその達成感を想像してうっとりとなった。それから、樺山先生がいうには、「そんなに難しいことじゃないだろ、ぼくが二升、工藤くんが二升、Sくんが二升、篠原くんは、一升かな、そうすればあとの三升くらい、あとは雑兵五、六人で何とかなるだろ。ぼくのウチでやろう。」こうして、樺山先生のお宅で二度ばかり「一斗会」を催していただいたが、残念ながら、「一斗」を達成することはできなかった。ぼくはたかだか、三合ばかりで酔いつぶれた。工藤さんが二升のみあげたかどうかはわからない。

プラハのビアホールでとめどなくビールを飲んだこともある。次から次に「アンテナを立てて」（半リットルのジョッキを頼むたびに、小さな紙に棒線が書き加えられていく）、そのときビールを飲んでいたのは4人だったか、5人だったか、棒線は最後に42本になった。「ぼくはビールはあまり飲まないけど、これならいくらでもいけるなあ」と嬉しそうな様子で、どうも思い返してみると、ぼくが工藤さんの「恩」に報いたのは、このとき

ばかりである。

豪酒、というのは、いくら飲んでも乱れなかったからだ。工藤さんが尊敬して止まなかった二宮先生も、酔うほどに話が高踏に傾いていったという。

工藤さん、もう何の憂いもなく、二宮先生と酌み交わしてください。

(しのはら たく・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)